

浮世絵で学ぶ お江戸子育て

1986年から子ども文化の研究のために、子どもに関連する浮世絵や歴史史料の収集と研究を続けている公文教育研究会。
広報の吉澤 明さんに、浮世絵から読み取れる江戸の子育て事情を教えてください。



七五三祝いの図

二代歌川豊国
弘化頃 (1844 - 1848)

先頭は三歳髪置きの娘で、髪を結い赤い振袖を着て抱え帯をした母におぶわれている。次は七歳帯解きの姉娘で、この日から付紐を用いない振袖を着て、頭には長寿の願いを込めた綿帽子を着けている。肩でかついでいるのは鳶職(とびしょく)の男で、後方に女性が寄り添っている。最後は、五歳男子の袴着で、袴(かみしも)を着て、ちりよけの揚帽子(あげぼうし)をかぶった前帯の祖母と手をつないでいる。お供の小僧はめでたい熨斗(のし)文様の風呂敷包を肩にかついでいる。

子どもの成長を祝う 通過儀礼

日本では「宝」にも勝る子どもが生まれると「お七夜(命名)」、「お宮参り」などの数多くの通過儀礼を行います。その目的は子どもの成長への感謝とこれからも健やかに育って欲しいという願いからです。中でも十一月十五日の「七五三」は日本の各地で執り行われている最も有名な通過儀礼です。

この「七五三」の由来は平安時代にさかのぼります。当時は子どもの死亡率が非常に高く、生まれた子どもが七歳になるまでは「人」ではなく「神」の子であり、実際にはこの世にまだ「命」が定着していないと考えられていたようです。そのため三歳から七歳に至るまでの間に無事に成長したことをお祝いのことが始まりと言われています。

江戸時代に入るとこの祝い方が変化し、三歳で「髪置き」(男女ともに髪の毛を伸ばしはじめる)、五歳には「袴着」(男子が袴を着けはじめる)、七歳には「帯解き」(女子が帯を締める着物を着るようになる)などの年齢に応じた儀式が行われるようになりました。当時、武家を中心に広まったこの儀式は、その後、庶民にも広がりをみせ、時期も十一月吉日から十一月十五日に固定されていったようです。

明治時代になってから「七五三」という行事として、これまで無事に成長してきたことに感謝し、今後健康で長生きするように神社に詣でるようになり、現在に至ります。「七五三」詣で小さな手に千歳飴を提げた子どもは、何ともほのぼのとして周りも幸せにしてくれます。まさに「子宝」ですね。

日本の
伝統的な子育て事情を
お伝えすることで
現代の子育てを応援します

KUMON
×
Happy-Note

江戸ミニ知識 千歳飴に込められた願い

千歳飴は「七五三」には欠かせませんが、「鶴」と「亀」の絵が描かれた手提げ袋に入った細長い紅白の飴をイメージされることと思います。子どもの生存率が低かった江戸時代に「鶴

は千年、亀は万年」の言い伝えのように子どもに長寿を願って誕生しました。甘味が貴重な時代だけに、わが子の長寿を願う親の切なる願いが伝わります。